

## 降誕をめぐる不幸と希望

牧師 山本 護

集会所の軒下に柿が吊るされて待降節に入りました。世界各地にはさまざまなドライフルーツがありますが、日本で一般的なのは干し柿くらいでしょうか。渋柿を干すと甘柿の数倍甘くなり、甘柿を干してもさほど変わらないらしい。ということは「渋」があの味わいの元素、謎めいた果実の変容です。

若い頃、いつ帰るとも分らない旅先で読んだ西東三鬼(1900~62)の句、「満天に不幸きらめく降誕祭」。あの時なぜ、この句に心打たれたのでしょうか。幸福が語られても、真実でなければどこもなく悪臭が漂う。三鬼には「パラシウト天地ノ機銃フト黙ル」という句があります。私なりに読み解けば、戦闘中ふわりと降りて来た一つの落下傘を、敵も味方も手を止めて呆然と見ている虚無でしょうか。悲惨な戦争のただ中であって戦争を拒絶する人間の衝動。思想や政治よりも確かな虚無の希望です。



「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる(ルカ 1:28)」。天使ガブリエルは、貧しく頬紅い田舎少女マリアに告げました。マリアが産むことになる子が「聖なる者、神の子と呼ばれる(1:35)」としても、苦しめられるのなら「不幸」ではないのか。

神の子が誕生し神殿へ聖別しに行く(2:22)、老シメオンからその子ゆえに「あなた自身も剣で心を刺し貫かれる(2:35)」と預言され、実際その通りになってしまいます。天使の言葉は、マリアにとってどんな「おめでとう」になるのか。いかに不幸であっても「主があなたと共におられる(1:28)」。それがマリアと世の清潔な真実になっていきます。

「満天に不幸きらめく降誕祭」。世にある一人ひとりの、なんと愛おしい「不幸」でありましょうか。読解の助けになる三鬼の作をもう一句。「黒き月のせて三日月いつまで冬」。存在のほとんどが闇にあっても、細い三日月が球体の全容を暗示しています。不幸は三日月。そして三日月と見えない黒き月の全体に「神が我々と共におられる(マタイ 1:23)」。

「不幸きらめく降誕祭」の「渋さ」。気がせいはいけません。つい吐き出してしまいそうな渋さには、甘さ以上の深い味わいが隠されており、降誕祭には食べ頃になります。Ω